

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	当直医に対する「死亡診断時の立ち振る舞い」ガイドラインの活用効果
演者名	北山 撰、村上 典由、片山 智栄、木内 大介、村上 玲子、遠矢 純一郎
所属	桜新町アーバンクリニック

目的

弊法人では、24 時間往診体制を担保するために当直医を配備している。主治医から依頼を受けて患者宅を往診する当直医にとっては、初めて対面する患者やその家族が困惑しているなかでの看取り対応を迫られることがよくある。また、在宅看取りを数多く経験した医師を毎回配備できるとは限らない点で、当直医が現場対応に困惑することもしばしばある。そこで、円滑な看取りを可能とすべく「死亡診断時の立ち振る舞い」ガイドラインを作成し、当直医のオリエンテーションに導入した。

実践内容

当該ガイドラインの内容には、死亡診断に向かう前の情報収集の確認、死亡診断時の心構え、患家への訪問から死亡診断までの行動指針、死亡後の処置に関する事項、死亡診断書の作成方法等を組み入れた。

実践効果・考察

当該ガイドラインを利用した医師にアンケートした結果、全体の 8 割の医師から「看取り対応の再確認になり参考になった」、「看取り経験が乏しくても不安なく出動できた」等のポジティブな意見が挙げられた。また、ガイドラインの存在により当直医に対する患者ご家族からのクレームやトラブルが減った結果として、円滑な看取りが可能になったと言える。

看取り経験の乏しい当直医でも、主治医と遺族との信頼関係を壊さずに、グリーフケアを意識した死亡確認が可能となった点は、今後在宅医療が普及していくなかにおいては意義あるものと考ええる。